

〈論 文〉

実践理論から見る新制度論のマイクロ・ファンデーション

張 益 民*

I はじめに

近年、新制度論の実証研究においては、エージェンシーの役割にフォーカスする研究が多い（e.g., Lounsbury & Crumley [2007]; Zilber [2011]）。これらの研究のおかげで、マクロな制度が組織や個人のアクターに支配的な影響を与えるという初期の新制度論の強い前提が緩和され、制度とエージェンシーがどのように共同で組織や個人のアクターの行動や、アイデンティティ、役割を形作るかについての我々の理解が深まった。一方、新制度論のマイクロ・ファンデーション理論は、近年では進展していない（Powell & Colyvas [2008]）¹⁾。制度現象をミクロな要因で論理的に説明する際に、新制度論では依然として Zucker [1977] が提唱した見解を引用している（Barley [2017]）。

しかしながら、Zucker [1977] の見解は、新しい制度論に関する最近の実証研究、特に「現場の制度」に関する幅広い問題意識に対して、十分な理論的基盤を提供することができなかった。具体的には、マクロな制度が個人や集団の実際の行動にどのように影響するのか（Lounsbury & Boxenbaum [2013]）、「埋め込まれたエージェンシーのパラドックス」をどのように解決するのか（Dalpiaz, Rindova, & Ravasi [2016]）、実務レベルの制度がフィールド・レベルの制度にどのように積み上がるのか（Smets, Morris, & Greenwood [2012]）などが挙げられる。Zucker [1997] の論述はこれらの問題意識に提供できる知見が少ない。

最近の新制度論の実証研究に新たな理論的基盤を提供するために、本研究では実践理論を用いる。本研究では、実践理論の研究者、特に Reckwitz [2002], Schatzki [2005; 2006; 2012], Nicolini [2012], Feldman & Orlikowski [2011] や Sandberg & Dall'Alba [2009] を参考に、制度論のマイクロ・ファンデーションに関する3つの理論的知見を提出した。1つ目は、制度が客体として存在するのではなく、日々の実践のプロセスの特徴として存在するということ。2つ目は、ある制度が、現場の他の制度、行動、物質的客体などと絡み合っているということ。3つ目は、現場の制度が物質によって支えられていると考えられており、実践と物質の束を通して、マクロな制度へと構築されていくということである。

これらの主張は、近年の新制度論の実証研究に新たな理論的基盤を提供するとともに、制度ロジックのアプローチを採用した実証研究や、制度ワークのアプローチを採用した実証研究に新たな研究の方向性を提示するものである。今後の研究では、制度的ロジックの社会的構築性と歴史的偶発性、および個々のアクターの実際の作業によって構築される制度的ロジックの多重性について、

* 京都大学大学院経済学研究科博士後期課程

より詳しく調査する必要があると主張する。次に、制度を発展・展開させる制度ワークや、物質的客体が制度ワークの形成と普及をどのように促進するかについて、より詳しく調査すべきであると主張する。

本論文の構成は以下の通りである。次の部分では、既存の制度のミクロ的基礎理論とその問題点を紹介する。第3章では、制度論の新たなミクロ基礎理論を構築するために実践論を用いる原因を述べ、実践論からの議論をまとめる。第4章では、実践理論に基づいた新しい制度論のミクロ的基盤がどのようなものかを論じる。第5章では、この新しいミクロ基盤が、制度論理や制度的作業に対してどのような意味を持ちうるかを論じる。

II 既存の新制度論のマイクロ・ファンデーション理論とその問題点

制度とは、社会的行動の比較的規則的なパターンである (Jepperson [1991])。正当性の圧力を受けた組織は、類似の構造を採用したり (Meyer & Rowan [1977])、他の組織の行動を模倣したりする (DiMaggio & Powell [1983])。さらに、制度は、認知的なスキーマとして、アクターに共通の理解を与える (DiMaggio [1988])。要するに、制度は、社会的な行動に意味と安定性を与え、組織の行動を形成し制約するのである (Scott [2001])。

制度論におけるマイクロ・ファンデーション研究は、制度的現象をよりミクロな現象で説明しようとする研究と言える (Harmon, Haack, & Roulet [2019])。マクロ的な社会現象に焦点を当ててきた制度論研究にとって、ミクロ的基盤研究は、制度形成のプロセス、日常的なアクターの社会生活における制度現象、制度維持や内生的な制度変化についての洞察を提供することができる。

制度論学者は、主にエスノメソドロジーと現象学を用いて、制度がどのように組織やアクターの行動を制限したり可能にしたりするかを説明している (DiMaggio & Powell [1991])。エスノメソドロジストの Garfinkel [1967] によると、ほとんどの認知は、意識の低いレベルで発生するルールに支配された慣習的で実用的な理性であり、意図性は後回しにされる。また、現象学者の Berger & Thomas [1967] によれば、特定のアクターの慣習的行動の類型としての制度は、認知構造としてあらかじめ行動パターンを設定し、人々の行動をコントロールしているという。Zucker [1977] はこれらの知見を用いて、制度は当然のこととして理解されているものと見なすべきだと主張した。彼女によれば、「制度化された行動が客観的な (objective) ものと外部的な (exterior) ものであると理解すべきである。他の行動者が行動に対する共通理解を変更せずに関わり行動を繰り返すことができるゆえに、行動は客観性を持つ。また、行動に対する主観的な理解が間主観的な理解として再構築されるゆえに、行動は外部世界の一部として見られる」(Zucker [1977] p. 728)。

Zucker の議論以降、制度論者の間ではエスノメソドロジーやマイクロ・ファンデーションへの関心が薄れてきている (Powell & Colyvas [2008])。その結果、エージェンシーに焦点を当てた制度論の実証研究が Zucker [1977] の議論を理論的基盤として用いる場合、3つの批判が挙げられる。

第1に、これらの実証研究が、マクロの制度がどのように現場における制度に還元されていくのかについての説明が不十分であると考えられる。前期の新制度論におけるマクロへの執着を克服するために、先行研究では、制度ロジック (Lounsbury & Boxenbaum [2013]) やフレーム (Jones & Livne-Tarandach [2008]) といった中距離の制度が集団アクターの行動に与える影響を研究して

きた。しかし、制度が現場のアクターによってどのように構築され、具体的な行動に変換されたかについての研究はほとんど行われていない (McPherson & Sauder [2013])。さらに、制度ロジック研究は社会構築主義を捨てて、ロジックを所与的で高次的なアイデア・タイプと捉えることが多く (Zilber [2017])、この捉え方が現場における制度を説明するには相応しくないと考えられる。なぜなら、現場の行動は「かなり平凡で、センスメーカー、調整と何とかやっていくことを目的にしている」(Powell & Rerup [2017] p. 312)。例えば、エスノメソドロジーの学者たちが現場における行動を説明するために、実践のロジックやセンスを要約するような理論を求めている。彼らは、現場のアクターが組織や社会を生産・再生産するために用いる方法を研究してきた (Nicolin [2012])。したがって、現場の制度がどのような形で表れているかを議論する必要がある。

第2に、制度とエージェンシーがそれぞれどのようにアクターの実践を形作るかについて、あまりにも単純化された前提を置いている研究が多い (Suddaby & Seidl [2013])。具体的に、初期の制度論の研究では、フィールドの同形化の圧力 (DiMaggio & Powell [1983])、合理化された神話 (Meyer & Rowan [1977]) や制度の認知的・規範的・規制的な力 (Scott [2001]) が強調されてきた。これらの研究は、個人が「文化的な愚か者」であり、組織行動は制度環境における社会的規範や規範的期待によって大きく説明されるという前提に基づいている (Suddaby & Seidl [2013] p. 332)。近年、制度ロジックや制度的企業家などといった研究では、組織や個人がエージェンシーを使って、制度的な慣習やシンボルを戦略的に利用し、制度に変化をもたらす現象が調査されている (McPherson & Sauder [2013]; Dalpiaz et al. [2016] など)。これらの研究は、個人を取り巻く社会的・文化的・経済的な制約を明確に認識し、効果的な選択を行うことができる「力強い主体」としての個人を想定している (Suddaby & Seidl [2013] p. 332)。どちらの前提も、現場のアクターの日々の実践を反映しているとは言えない。

第3に、現場の制度がどのようにしてマクロ制度の維持、変化、崩壊に至るまで構築されていくのかについての研究が不足している。Barney & Felin [2013] が指摘するように、個々の人間の相互作用は時に複雑に積み重なり、構成要素に還元できない創造的で集合的な成果を生み出す。例えば、経済合理性に従う投資者は時としてバブルを引き起こすことがある。この知見を制度論に当てはめてみると、エスノメソドロジーの研究者にとっては、解釈の手順、つまり日常的な相互作用に必要な、いわゆる「当たり前のルール」が最終的な制度となる (Cicourel [1981])。例えば、会話の中で順番に発言するための方法や手順は、制度である (Sachs [1974])。一方、新制度論では、よりマクロで当たり前とされる理解に焦点を当てている (Barley [2017])。例えば、企業に対する支配の形態の変化 (Fligstein [1990]) や、アクティブな資産運用の普及 (Lounsbury & Crumley [2007]) などが挙げられる。現場の制度がどのように創発され、よりマクロな制度の維持、変化、崩壊に積み重ねられているかについて、先行研究で与えられた知見は少ない。

したがって、新しいマイクロ・ファンデーション理論では、次のような課題に取り組む必要がある。1つ目は、現場における制度の顕在化と機能を探ることである。2つ目は、現場のアクターの力によって、現場の制度が再生産され、変化していく様子を探ることである。3つ目は、現場の制度がよりマクロな制度へと蓄積されていく過程を探ることである。本研究は実践理論を援用し、新しいマイクロ・ファンデーション理論を提示する。

Ⅲ 実践理論からの知見

実践理論を援用する原因は以下ようになる。Smets et al. [2017] によれば、実践理論と新制度論は同様に、Bourdieu [1977][1990] と Giddens [1984] の研究を援用してきた。一方で、新制度論とは異なり、実践理論は、行為が相互に結びついた世界において、行為者のエージェンシーと実践の遂行性によって引き起こされる変化や、実践のネットワークに注目してきた。それゆえ、実践理論は、第一線のアクターの実際の行動とそれが制度に与える影響を調査し、エージェンシーの役割の概念を洗練させるために用いることができる (Smets et al. [2015]; Jarzabkowski, Smets, Bednarek, Burke & Spee [2013])。さらに、ミクロ現象とマクロ現象の二項対立が緩和され、ダイナミックに展開される実践のフィールドが分析の出発点となる (Chia & MacKay [2007])。

まず、実践理論によれば、世界は、繰り返し起こるルーチン的な遂行であり (Nicolin [2012])、毎日の行動と実践を通じて実行されている (Feldman & Orlikowski [2011])。「実践とは構造化された時間と空間の中で行われるオープンエンドの多様な行動であり」、どのような実践でも、相互関連する複数の行動によって構成される (Schatzki [2005] p. 1863-1864)。例えば、文章を書くこと、料理することや教えることなどは実践である。特定の実践と関連性を持つためには、ある行動は特定コンテキストにおいて、実践参加者にとって意味があるものでなければならず、理解可能で達成可能であり、繰り返し実行され認知されなければならない (Schatzki [2012]; Feldman & Orlikowski [2011])。そのため、実践理論は、社会的現実を解明する際に用いられる分析の規模を、抽象的な社会構造から個人の実際の行動へと縮小した (Powell & Retup [2017])。

また、実践理論によれば、私たちの基本的な存在形態は「絡み合い」(entwinement) である (Sandberg & Dall'Alba [2009] p. 1351)。言い換えれば、私たちは常に実践の世界で他の人や物事と絡み合っている状態である (Sandberg & Tsoukas [2011])。個人の実践が継続的な実践の一部であり、一連の他の実践を背景にしている限り、それは発生として理解できるようになる (Rouse [2007])。このように、実践理論は、社会生活がこの生活を取り囲む特定の文脈と本質的に結びついていると主張している (Schatzki [2005])。具体的には、Heidegger [1929] によれば、我々の世界における存在が社会的と物質的实践によって構築されている。例えば、世界における私たちの存在は、社会的・物質的な実践によって構築されている。例えば、職人の視点から見ると、ハンマーはあらかじめ決められた性質を持った物体ではなく、「大工仕事」や「鍛冶屋」などの設定の一部として存在しているのである。Schatzki [2005] は、このような文脈を「サイト」と呼び、一連の実践と物質的な配置の組み合わせであるとしている。例えば、教室は、指導や机や椅子の配置などで構成されている。このような世界観を持つことで、本来、実体とされているものを、その文脈との関係で見直すことができる。

さらに、実践理論によれば、実践を理解するためには、物質的客体を考慮に入れる必要がある (Nicolin [2012])。例えば、料理、授業、ハイキングなどの実践には、身体、調理器具、本や登山靴などの物体が不可欠である。先行研究では、物質的なものがどのように実践に参加するかについて、いくつかの理論が提唱されている。Orlikowski [2006] によると、物質的なものは小道具や足場として機能し、行動を可能にし、構築する。このような主張は、物的対象は実践を構成するが、実践そのものを伝播するものではないという立場に立つものである (Schatzki [2002])。一方、Latour [2005] によれば、人工物は人間と同じように実践に完全に参加することができ、実践をさま

ざまな空間や時間に拡張することができる。彼は、実践とは単に相互主観性の集まりではない、と言っている。このような知見は、制度論のミクロ的な基盤にも示唆を与えることができる。

Ⅳ 実践的理論の知見を取り入れた制度論のマイクロ・ファンデーション

1 ルーチン化され、反復に達成されているものとしての制度

制度はモノとして存在するのではなく、日々行われている実践の特徴として考えられている。当たり前と思われる共通理解は実践という明瞭性を提供する地平線の中にしか存在できない。また、ある状況下で実践を遂行するためには、アクターは即興やパフォーマンスなどを行う必要があるため、実践が行われるたびに、当たりの理解が構築され、更新されていくことになる。例えば、Barley & Tolbert [1997] は、構造化理論を引用して、制度や制度的に規定された行動スクリプトは、現場での行動を通じて実行されるたびに、新たに客観化・外在化されると主張している。Feldman [2000] によれば、ルーチンの安定性や反復性は完全に先験的に決定されるものではなく、実行可能性によって、実行されるたびにルーチンに柔軟性や変化がもたらされるとしている。したがって、実践理論の観点からは、当たり前と思われている理解が常に更新されるため、「埋め込まれたエージェンシーのパラドックス」は存在しないように思われる。それどころか、制度はダイナミックに発展・展開し続けるものとして捉えるべきだと考えられている。さらに、個人は「文化的な愚か者」や「強力な主体」ではなく、実践を担い、実行する現場の知恵に富んだ行動者である(Reckwitz [2002])。

2 「絡み合い」の中に存在する現場における制度

現場における制度の現れと役割は、この制度に意味を与える一連の実践と物質的配置によって決定されると考えられている。先行研究では、現場における制度は、ルール (Heaphy [2013])、アイデンティティ (Giorgi & Palmisano [2017])、制度間の対立に対処するプロセス (Smets, Jarzabkowski, Burke & Spee [2015])、プラクティス (Zilber [2002]) などの形で現れることが示されている。また、先行研究では、これらの制度が果たす多様な役割が示されている。例えば、制度はアクターによって作られたり、維持されたり、破壊されたり (Lawrence & Suddaby [2006])、道具として使われたり (McPherson & Sauder [2013])、融合したり孤立したり (Smets et al. [2015]) などのことがある。実践理論から見れば、特定の現場における制度のさまざまな形態や役割は、この制度と絡み合っている行動、物質、その他の制度によって形成されていると考えられる。このように、新制度論では、制度が行動を制限したり可能にしたりすることを論じているが (e.g., Giddens [1984])、制度が個々のアクターにどのような形で影響を与えるかについての知識を増やすためには、制度が特定の「絡み合い」の中でどのように存在しているかに注意を払うべきであると考えられている。

3 物質と実践の束によって、マルチ現場までに拡散する制度

現場の制度は物質によって永続化され、実践と物質の束を通して蓄積され、よりマクロ的な制度になると考えられる。具体的には、制度は、実践の文脈と物質の束の間のつながりのパターンにしたがって、異なる空間的・時間的な文脈に翻訳されると考えられている。例えば、Smets et al.

[2012] は実践理論を取り入れ、企業間ネットワークに埋め込まれている企業が、取引をより効率的にするために互いに学び、調整することで、新しい実践が気づかれずに拡散することを示した。Nicolin & Monteiro [2016] によると、スキーマの新しい楽しみ方の普及過程を調査したいのであれば、インターネットのブログや業界リーダーの定例会議などの関係ネットワークにおける相互作用の過程を追うべきだとしている。このように、実践理論の観点からすると、私たちは「フラット」な世界に生きており (Smets et al. [2017])、マクロの制度は広大な実践の寄せ集めの中に、あるいはフィールド全体の規模で行われる特定の実践の中に存在している (Nicolin & Monteiro [2016])。新しいマイクロ・ファンデーション理論は、制度ロジックや制度ワーク研究にいくつかの示唆を与えることができる。

V インプリケーション

1 制度ロジックの研究に対するインプリケーション

Fridland & Alford [1991] は、市場、家族、宗教などの各制度は、ロジック、いわゆる物質的な実践と象徴的な構造のセットを通じて、人々の嗜好、組織的な利益を形成し、行動のレパートリーを提供すると主張している。「(制度ロジックとは) 文化的シンボル、物質的实践、仮説、価値観、信念などの社会的に構築された歴史的なパターンのことである。これらのパターンを通して、個人は自分の物質的存在を生産・再生産し、時間と空間を組織化し、日々の行動に意味を与えている」。制度ロジックの関心は、複数の制度的秩序における組織や個人のアクターの位置づけが、これらのアクターに与える影響にある (Thornton & Ocasio [1999] p. 804)。

制度論理の理論的アプローチを採用した実証研究に対しては、2つの批判が可能である。第1に、制度論理の実証研究の多くは、現場の制度的現象、組織間・組織内のダイナミクスに焦点を当てており (e.g., Thornton & Ocasio [1999]; Dalpiaz et al. [2016])、個人の日常的な実践と制度ロジックの相互作用に関する研究はまだ少ない (e.g., McPherson & Sauder [2013])。しかし、多くの個々のアクターにとって、制度ロジックの多元性や変化は、日常生活の構成要素の1つとして経験されている (Smets et al. [2015])。第2に、制度ロジックの実証的研究の多くは、制度的多元性や制度的変化が社会生活にどのような影響を与えるかに焦点を当てている。制度ロジックを説明変数として扱った結果、所定の高レベルで存在する理想的な形とみなされることが多い (Zilber [2017])。組織論の中で、特定の制度ロジックが歴史的に構築されていく過程に関する研究は少ない (Mutch [2018])。また、制度のマイクロ・プロセスを通じた制度ロジックの維持と変化に関する研究も少ない (Purdy, Ansari & Gray [2017])。

第1に、実践論を採用すれば、制度ロジックの社会的構築や歴史的偶有性の本質を究明することができる。その理由は、実践理論は社会構造を実体として捉えていないため、既存の社会構造が実践によってどのように生成・再生産されるのか、歴史的偶発性に導かれて特定の取り決めがどのように出現し、安定化し、あるいは失敗するのといった問題を探求できるアプローチだからである (Latour [2005])。したがって、制度ロジックそのものが調査対象となると考えられる。例えば、Quattrone [2015] は、16世紀後半から17世紀前半におけるジェズイットの会計と秩序作りの実践の発展を研究し、ジェズイットの合理性は手続き論理に基づく信徒への継続的な問いかけを通じて発展すると論じている。本研究は、制度ロジックに内在する矛盾、歴史的動態、非先験的・非完結

的・非客観的な性質を改めて指摘している。今後の研究では、歴史的手法やエスノメソドロジーを用いて、制度ロジックがどのように歴史的に構築されてきたのか、異なる社会的文脈における類似の制度ロジックどのように異なるのかといった問題を調査することができる。

第2に、実践理論を採用することで、制度ロジックの多元性や変化を、現場のアクターの実践によって構築されたものとして捉えることができる。先行研究で問題にされてきた制度ロジック間の激しい価値観や信念の対立は、現場のアクターの視点から見ると、特定の文脈で特定の実践をどのように実施するかという実践面での対立として捉えることができる。制度ロジック間の関係は「実践によって構築される」(Smets & Jarzabkowski [2013] p. 1280) のである。一方、多くの先行研究では、本研究の立場とは異なり、それらの制度ロジック間の関係は、組織の戦略や構造によって対処されると主張している (e.g., Smets & Besharov [2019]; Greenwood, Raynard, Kodeih, Micelotta & Lounsbury [2011])。しかし、実践理論の観点からは、組織戦略や構造は、現場の行動者を取り巻く実践や物質の配置の一部であり、制度ロジック間の関係には間接的にしか影響しないと考えられている。今後の研究では、既存の組織構造の下で、個人がどのようにダイナミックにロジック間のバランスをとるのか (Smets et al. [2012])、また、現場の文脈の特徴が制度ロジック間の関係をどのように形作るのかといった問題を探る必要がある。

2 制度的ワークの研究に対するインプリケーション

新制度論における過度に社会化された個人観を是正するために、Lawrence & Suddaby [2006] は、制度ワークという概念を提唱した。彼らは、制度ワークを「制度を創造し、維持し、崩壊させようとする個人や組織の意図的な行動」と定義した (Lawrence & Suddaby [2006] p. 215)。このアプローチでは、社会現象を実践の視点から解釈し、アクターの仕事がいづ、どのように、なぜ、制度を形成するのか、また、どのような要因がアクターの制度ワークを行う能力や状況に影響を与えるのかを問題としている (Hampel et al. [2017])。このアプローチは、構造と行動、またはエージェンシーと制度の間のギャップを埋め、制度の背後にいるアクターに注目するための理論的基盤を提供してきた (Lawrence & Suddaby [2006])。

制度ワークというアプローチを採用した実証研究に対して、2つの批判が生じた。1つ目は今までの実証研究が、フィールド・レベルの実体と組織によって行われた実践にフォーカスすることが多く (e.g., Helfen & Sydow [2013]; Micelotta & Washington [2013])、現場行動者の実践があまり調査されていない。その結果、制度ワークの実証研究は、ミクロ・レベルのルーチンを探索し、仕事の現場にいる行動者のエージェンシーに対する理解を広げていくところに欠けている (Smets et al. [2017])。2つ目は、制度ワークの実証研究は主に歴史的構造物と認知的構造物が行動に対する影響にフォーカスしてきて、行動の物質的な側面を背景の一部として扱うことが多い (Monteiro & Nicolini [2015])。アクター・ネットワーク理論の学者によると、社会的現象はヒトと非ヒトのもの共同努力によって、時間的と空間的に生み出され、維持されたものであるという (Latour [1996])。また、Pinch [2008] によると、制度が必然的に物質的な側面を備えている。物質性が制度の社会的な側面を生産・再生産するというエージェンシーを発揮している。ゆえに、物質的ものによる制度ワークへの動機づけと、制度ワークの形成を調査する必要がある (Hampel et al. [2017])。

実践理論をより本格的に取り入れることで、制度ワークにいくつかの新しい知見を提供できる。

第1に、個々のアクターの日常的な行動がどのように制度ワークとして機能し、現場での制度の開発・展開に貢献しているのかを調査することができるようになる。例えば、Smets & Jarzabkowski [2013])によれば、個人が相反する制度的実践に遭遇したとき、自分の仕事を軌道に乗せるために行う交渉や適応は、制度の複雑性を軽減する制度ワークとして機能する。Smets et al. [2017])によれば、現場のアクターの行動は、意図しない形で制度に何らかの影響を与えることがある。彼らは、このインパクトこそが、実践理論を取り入れた制度論が重視したい点だと言う。これまでの実証研究の多くは、Lawrence & Suddaby [2006])が定義した、制度を創り、維持し、破壊するという制度ワークに焦点を当てている。実践のレンズを採用すれば、どのような制度ワークが現場で展開されているのか、どのようなダイナミックな制度ワークが日々継続的に行われているのかを調査することができる。

第2に、実践理論をより完全に取り入れることで、物質的なオブジェクトが制度ワークをどのように動機づけ、形成するかを調査することができる (Hampel et al. [2017])。なぜなら、実践理論の研究者たちは、社会構造の確立と永続において、物質的なオブジェクトが積極的な役割を果たしていると主張しているからである (Monteiro & Nicolini [2015])。具体的には、物質的なオブジェクトは、実践を構成し (Schatzki [2001])、可能にし (Orlikowski [2006])、他の時間と空間に拡張することを可能にさせると主張している (Latour [2005])。今後の研究では、アクター・ネットワーク理論を引き合いに出して、物質的なオブジェクトが制度ワークにおいてどのような能動的な役割を果たしたかを調査することができる (Hampel et al. [2017])。あるいは、Schatzki [2001] や Orlikowski [2006] などの実践理論研究者の理論を引用して、物質的なオブジェクトが制度ワークの基盤としてどのような役割を果たしているかを研究することもできる。

注

- 1) マクロファンデーションの研究は、ミクロ的な社会現象からマクロ的な社会現象に向かう繋がりを問題意識にしている (Barney & Felin [2013])。したがって、本研究は Felin, Foss, & Ployhart [2015] の議論を参考し、マイクロ・ファンデーション研究の関心が、ミクロ的な社会現象はどのようにマクロ的な社会現象に影響を与えているか、ミクロ的な社会現象はどのように創発的にマクロ的な社会現象まで積みあげられてきたか、マクロ的な社会現象はどのようにミクロな現象と相互作用によって仲介されているかという3つの間にあると考えられる。

参考文献

- Barley, S., "Coalface institutionalism" In *The Sage handbook of organizational institutionalism*, ed. by R. Greenwood, C. Oliver, T. B. Lawrence & R. E. Meyer, 55 City Road, London: SAGE Publications Ltd, 2017.
- Barley, S.R., & P.S. Tolbert, "Institutionalization and Structuration: Studying the Links between Action and Institution," *Organization Studies*, 18, 1, 1997, 93-117.
- Barney, J.A.Y., & T. Felin, "What are microfoundations?" *Academy of Management Perspectives*, 27, 2, 2013, pp. 138-155.
- Bourdieu, P., *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge University Press, 1977.
- Bourdieu, P., *The Logic of Practice*, Cambridge, Polity, 1990.
- Chia, R., & B. MacKay, "Post-processual challenges for the emerging strategy-as-practice perspective: Discovering strategy in the logic of practice" *Human relations*, 60, 1, 2007, pp.217-242.
- Cicourel, A.V., "The role of cognitive-linguistic concepts in understanding everyday social interactions," *Annual*

- review of sociology*, 7, 1, 1981, 87-106.
- Dalpiaz, E., V. Rindova, & D. Ravasi, "Combining logics to transform organizational agency: Blending industry and art at Alessi," *Administrative Science Quarterly*, 61, 3, 2016, pp. 347-392.
- DiMaggio, P.J., & W.W. Powell, "Introduction" In *The new institutionalism in organizational analysis*, ed. by W. W. Powell. & P.J. DiMaggio., Chicago, University of Chicago Press, 1991.
- DiMaggio, P.J., & W. W. Powell, "The iron cage revisited: Institutional isomorphism and collective rationality in organizational fields," *American sociological review*, 48, 2, 1983, pp. 147-160.
- DiMaggio, P.J., "Interest and agency in institutional theory" In *Institutional patterns and organizations*, ed. by L. Zucker, Cambridge, MA, Ballinger, 1988.
- Feldman, M.S., "Organizational routines as a source of continuous change," *Organization science*, 11, 6, 2000, pp. 611-629.
- Feldman, M. S., & W.J. Orlikowski, "Theorizing practice and practicing theory," *Organization science*, 22, 5, 2011, pp. 1240-1253.
- Felin, T., Foss, N. J., & Ployhart, R. E., "The microfoundations movement in strategy and organization theory," *The Academy of Management Annals*, 9, 1, 2015, pp. 575-632.
- Fligstein, N., *The transformation of corporate control*, Cambridge, MA, Harvard University Press, 1990.
- Friedland, R., & R.R. Alford, "Bringing society back in: symbols, practices, and institutional contradictions" In *The new institutionalism in organizational analysis*, ed. by W. W. Powell. & P. J. DiMaggio., Chicago, University of Chicago Press, 1991.
- Garfinkel, H., *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliffs NJ, Prentice Hall, 1967.
- Giddens, A., *The Constitution of Society*, Cambridge, Polity, 1984.
- Giorgi, S., & S. Palmisano, "Sober intoxication: Institutional contradictions and identity work in the everyday life of four religious communities in Italy," *Organization Studies*, 38, 6, 2017, pp. 795-819.
- Greenwood, R., M. Raynard, F. Kodeih, E. R. Micelotta, & M. Lounsbury, "Institutional complexity and organizational responses," *Academy of Management annals*, 5, 1, 2011, pp. 317-371.
- Hampel, C., T.B. Lawrence, & P. Tracey, "Institutional work: Taking stock and making it matter" In *The Sage handbook of organizational institutionalism*, ed. by R. Greenwood, C. Oliver, T. B. Lawrence & R. E. Meyer, 55 City Road, London: SAGE Publications Ltd, 2017.
- Harmon, D.J., P. Haack, & T.J. Roulet, "Microfoundations of Institutions: A Matter of Structure Versus Agency or Level of Analysis?" *Academy of management review*, 44, 2, 2019, pp. 464-467.
- Heaphy, E. D., "Repairing breaches with rules: Maintaining institutions in the face of everyday disruptions," *Organization Science*, 24, 5, 2013, pp. 1291-1315.
- Heidegger, M., *Being and Time*, New York, Harper and Row, 1962.
- Helpen, M., & J. Sydow, "Negotiating as institutional work: The case of labour standards and international framework agreements," *Organization Studies*, 34, 8, 2013, pp. 1073-1098.
- Jepperson, R.L., "Institutions, institutional effects, and institutionalism" In *The new institutionalism in organizational analysis*, ed. by W. W. Powell. & P. J. DiMaggio., Chicago, University of Chicago Press, 1991.
- Jones, C. & R.Livne-Tarandach, "Designing a frame: rhetorical strategies of architects," *Journal of Organizational Behavior*, 29, 2008, pp. 1075-1099.
- Latour, B., "On interobjectivity," *Mind, Culture, Activity*, 3, 4, 1996, pp. 228-245.
- Latour, B. *Reassembling the social: An introduction to actor-network-theory*, Oxford, UK, Oxford University Press, 2005.
- Lawrence, T.B., & R. Suddaby, "Institutions and institutional work" in *The Sage handbook of organization studies*, ed. by S. Clegg, C. Hardy, T. Lawrence & W. R. Nord, 55 City Road, London, SAGE Publications Ltd, 2006.
- Lounsbury, M., & E. Boxenbaum, "Institutional logics in action" In *Institutional logics in action*, ed. by M. Lounsbury

- & E. Boxenbaum, Bingley, West Yorkshire, Emerald Group Publishing Limited, 2013.
- Lounsbury, M., & E.T. Crumley, "New practice creation: An institutional perspective on innovation," *Organization studies*, 28, 7, 2007, pp. 993-1012.
- McPherson, C.M., & M. Sauder, "Logics in action: Managing institutional complexity in a drug court," *Administrative Science Quarterly*, 58, 2, 2013, pp. 165-196.
- Meyer, J.W., & B. Rowan, "Institutionalized organizations: Formal structure as myth and ceremony," *American journal of sociology*, 83, 2, 1997, pp. 340-363.
- Micelotta, E. R., & M. Washington, "Institutions and maintenance: The repair work of Italian professions," *Organization Studies*, 34, 8, 2013, pp. 1137-1170.
- Monteiro, P., & D. Nicolini, "Recovering materiality in institutional work: Prizes as an assemblage of human and material entities," *Journal of Management Inquiry*, 24, 1, 2015, pp. 61-81.
- Mutch, A., "Practice, substance, and history: Reframing institutional logics," *Academy of Management Review*, 43, 2, 2018, pp. 242-258.
- Nicolini, D., *Practice theory, work, and organization: An introduction*, Oxford, UK, Oxford University Press, 2012.
- Nicolini, D., & P. Monteiro, "The Practice approach: For a praxeology of organizational and management studies" In *The Sage Handbook of Process Organization Studies*, ed. by H. Tsoukas & A. Langley, 55 City Road, London, SAGE Publications Ltd, 2016.
- Orlikowski, W.J., "Material knowing: the scaffolding of human knowledgeability," *European Journal of Information Systems*, 15, 5, 2006, pp. 460-466.
- Pinch, T., "Technology and institutions: Living in a material world," *Theory and Society*, 37, 2008, pp. 461-483.
- Powell, W.W., & J.A. Colyvas, "Microfoundations of institutional theory" In *The Sage handbook of organizational institutionalism*, ed. by R. Greenwood, C. Oliver, K. Sahlin-Andersson & R. Suddahy, 55 City Road, London, SAGE Publications Ltd, 2008.
- Powell, W.W., & C. Rerup, "Opening the black box: The microfoundations of institutions" In *The Sage handbook of organizational institutionalism*, ed. by R. Greenwood, C. Oliver, T. B. Lawrence & R. E. Meyer, 55 City Road, London: SAGE Publications Ltd, 2017.
- Purdy, J., S. Ansari, & B. Gray, "Are Logics Enough? Framing as an Alternative Tool for Understanding Institutional Meaning Making," *Journal of Management Inquiry*, 28, 4, 2019, pp. 409-419.
- Quattrone, P., "Governing social orders, unfolding rationality, and Jesuit accounting practices: A procedural approach to institutional logics," *Administrative Science Quarterly*, 60, 3, 2015, pp. 411-445.
- Reckwitz, A., "Toward a theory of social practices: A development in culturalisttheorizing," *European journal of social theory*, 5, 2, 2002, pp. 243-263.
- Rouse, J., "Practice philosophy" In *Handbook of the philosophy of science: Philosophy of anthropology and sociology*, ed. by S. Turner & M. Risjord, London, Elsevier, 2007.
- Sachs J.M., "Memory in reading and listening to discourse," *Memory and Cognition*, 2, 1, 1974, pp. 95-101
- Sandberg, J., & G. Dall'Alba, "Returning to practice anew: A life-world perspective," *Organization Studies*, 30, 12, 2009, pp. 1349-1368.
- Sandberg, J., & H. Tsoukas, "Grasping the logic of practice : Theorizing through practical rationality," *Academy of Management Review*, 36, 2011, pp. 338-360.
- Schatzki, T., "Introduction: Practice theory" In *The practice turn in contemporary theory*, ed. by T. R. Schatzki, K. Knorr Cetina & E. von Savigny, London, England, Routledge, 2001/
- Schatzki, T.R., *The site of the social: A philosophical account of the constitution of social life and change*, University Park, PA, Pennsylvania State University Press, 2002.
- Schatzki, T. R. , "Peripheral vision: The sites of organizations," *Organization studies*, 26, 3, 2005, pp. 465-484.
- Schatzki, T.R., "On organizations as they happen," *Organization studies*, 27, 12, 2006, pp. 1863-1873.

- Schatzki T., "A primer on practices: Theory and research" In *Practice-Based Education*, ed. by H. J. Barnett & S. Billett, London, Sense Publishers, 2012.
- Scott, W.R., *Institutions and Organizations*, 2d ed. Thousand Oaks, CA, Sage, 2001.
- Smets, M., & P. Jarzabkowski, "Reconstructing institutional complexity in practice: A relational model of institutional work and complexity," *Human Relations*, 66, 10, 2013, pp. 1279-1309.
- Smets, M., A. Aristidou, & R. Whittington, "Towards a practice-driven institutionalism" In *The Sage handbook of organizational institutionalism*, ed. by R. Greenwood, C. Oliver, T. B. Lawrence & R. E. Meyer, 55 City Road, London: SAGE Publications Ltd, 2017.
- Smets, M., R. Greenwood, & M. Lounsbury, "An institutional perspective on strategy as practice" In *The Cambridge handbook of strategy as practice*, ed. by D. Golsorkhi, L. Rouleau, D. Seidl & E. Vaara, Cambridge, Cambridge University Press, 2015.
- Smets, M., P. Jarzabkowski, G. T. Burke, & P. Spee, "Reinsurance trading in Lloyd's of London: Balancing conflicting-yet-complementary logics in practice," *Academy of management journal*, 58, 3, 2015, pp. 932-970.
- Smets, M., T.I.M. Morris, & R. Greenwood, "From practice to field: A multilevel model of practice-driven institutional change," *Academy of Management Journal*, 55, 4, 2012, pp. 877-904.
- Smith, W.K., & M.L. Besharov, "Bowing before dual gods: How structured flexibility sustains organizational hybridity," *Administrative Science Quarterly*, 64, 1, 2018, pp. 1-44.
- Suddaby, R., D. Seidl, & J. K. Lê, "Strategy-as-practice meets neo-institutional theory," *Strategic Organization*, 11, 3, 2013, pp. 329-344.
- Thornton, P.H., & W. Ocasio, "Institutional logics and the historical contingency of power in organizations: Executive succession in the higher education publishing industry, 1958-1990," *American journal of Sociology*, 105, 3, 1999, pp. 801-843.
- Thornton, P.H., W. Ocasio, & M. Lounsbury, *The institutional logics perspective: A new approach to culture, structure and process*, New York, NY, Oxford University Press, 2012.
- Zilber, T.B., "Institutional multiplicity in practice: A tale of two high-tech conferences in Israel," *Organization Science*, 22, 6, 2011, pp. 1539-1559.
- Zilber, T., "How institutional logics matter: A bottom-up exploration" In *How Institutions Matter! (Research in the Sociology of Organizations)* ed. by J. Gehman, M. Lounsbury, R. Greenwood, Bingley, West Yorkshire, Emerald Group Publishing Limited, 2017.
- Zucker, L.G., "The role of institutionalization in cultural persistence," *American sociological review*, 42: 1977, pp. 726-743.